

# 総合学習実践のまとめ

徳井輝雄

【抄録】総合学習の必要性は次の4点にある。①現代社会からの教育への客観的要請に応える。②教育の現状改革の糸口として。③より深い教科指導のために。④学校行事や生活の指導と教科指導との結合。

【キーワード】総合学習

## 1. はじめに

1993年から学年進行で実施され始めた高校の新しい教育課程が本年度（1996年4月）で完結し、全学年が新教育課程での授業を受けている。それにともない、本校の高校3年生（文系選択者）を対象にして10年間実施されてきた総合学習が発展的に解消した。既に本校では、1995年度から総合人間科という新教科の全校的試行が始まっている。この中に10年間続いた総合学習の実践理念は引き継がれ、その飛躍的發展が期待されている。

ここでは、総合人間科の発展の一助とするために1971年からこれまでの主に筆者がかかわってきた総合学習を省みて総括をする。

## 2. 総合学習の必要性

### ～なぜ総合学習なのか～

#### 2-1 時代の要請

##### 2-1-1 公害問題から地球環境問題へ

筆者は1971年から公害教育の研究を当時の本校の有志とはじめた。それは、教育は時代の要請を随時取り入れねばならない事、したがって、当時公害事件が政治や社会問題となっていたことから、公害問題の解決に教育の面からも努力する必要があると言う考えに基づいたものであった。

公害研究グループの各メンバーは自己の担当教科の中でどの様に公害が扱われているかを調査することからその実践をはじめた。

公害教育の実践を通じて次のような公害教育の意義を指摘した。（名古屋大学教育学部附属中学・高等学校紀要 第17集（1971年）P169「公害教育について」参照）

公害教育は 生徒も教師も学習や教育の目的を意識することが出来る。公害防止と言う目的に向けて教育や学習の場面で創造性や総合性を発揮できる。これは教育や学習が何の為に誰の為にされるのかというこ

とを再確認することになる。公害に反対する住民運動に付いて知ることによって新の民主主義を学ぶことが出来る。即ち地に付いた民主主義教育が出来る。公害の根本原因をさぐることで、住民が平和に暮らすにはどう言う政治がなされどう言う経済の仕組みが必要かを学ぶことができる。これは平和教育にもつながる。

更に、1973年には筆者を含めた公害教育研究グループは次のような指摘をした。公害教育は、各教科が連携して総合的に行うこと。社会科学的な面と自然科学的な面の両面から行うこと。これは、総合的科目の実体の一つである。（名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第18集（1973年）P100「公害教育の試み」参照）

更にこの年の本校の主催する中等教育研究協議会の公害教育分科会の中で次の3点が指摘された。公害の深刻化にともなって科学に対する不信感が生徒の中に生まれている。科学は公害を防止するのに役立つ事を知らせて不信感を除き、学習意欲を取り戻させなければいけない。断片的な知識を与えるのではなく、総合的な形をとって学習を展開すること。それには総合学習教材として、公害というテーマの中に多くの学習内容を投入し、総合的に処理していく事が有効である。総合力を養う教材ともなる。科学は近付き難い難解なものという感じを一般に与えている事が問題である。現象をなぞるのではなく基礎的なことや原則的なことをしっかり学習させる。そして誰もが公害を正確に見破ることが出来るようにすべきである。

現在、地球規模の汚染が進行するなかで環境教育の必要性が叫ばれている。地球環境問題は人類の行く末を左右する緊急かつ重い課題である。その解決の為、現代社会が教育界に環境教育の実施を要請している。環境教育の実践には公害教育のさらなる発展と徹底が必要である。勿論総合学習形式の授業で行うべきものである。1995年度から本校で始まった総合人間科で中学2年と高校1年で環境問題をとりあげていることはこのような時代の要請に答えたものである。

2-1-2 平和教育、生命尊重の教育及び教育の人間化

平和な社会を作ることは我々人類の共通の願いであり、これは教育の大目標であることは、心ある人びとの等しく認めるところである。平和教育を学校教育の基本に据え、総合学習的に実践することの意義にはつぎのものがある。

- ① 教育本来の目的である「世界の平和と人類の福祉」の追求になる。生徒のいじめ・自殺問題への根本的対策は、この教育基本法が掲げられる教育本来の目標を、学校教育全体の中で日々追求することの中にある。
- ② 教科教育の真の目的を問う事が出来る。即ち教科教育の真の目的の一つは、平和に付いて考えることの出来る基礎学力を付けることにあると。つまり、科学技術の使い方に対する批判力を持たせ、また、現実の政治・経済について考える力を養い、本当に人類に役立つ科学技術とはどんなもので、またその利用が正しく行えるような政治・経済体制はどんなものかを考える基礎力を付けることである。
- ③ 集団のなかでの基本的な生活習慣に関する指導の指針となる。すなわち基本的人権の擁護と進展、言論の自由、クラスメートとの紛争を暴力を使わずに解決する方法などに付いて学校生活、即ち、生徒会活動、HR活動、部・サークル活動等を通じて学ぶような指導が意識的に行われやすくなる。
- ④ 学校行事の運営に関する基本的指針となる。

教科指導と学校行事の指導を、「人間」や「平和」をキーワードとして有機的に結び付けた指導がしやすくなる。すなわち生徒を主人公とした儀式のあり方やテーマをもった授業の一環としての修学旅行のあり方などを、平和教育の観点から考えることによってより探究しやすくなる。

このような意義を持つ平和教育は教科にとらわれない総合的学習によってこそ展開が可能になる。更にすすんで、平和教育や生命尊重の教育を基本にした総合的教育課程の編成が可能になる。これを実現する過程で生徒も教師も父母も、勉学の真の意味を考える契機となることを再度強調したい。

ここでは、1986年から総合学習研究グループによって始められた、高校三年生の文科系選択者を対象にした総合学習の授業を、平和教育・生命尊重の教育の観点で総括して報告する。

(名古屋大学教育学部附属中・高等学校研究紀要 第35集(1990年)P9「平和教育としての総合学習」を参照)

総合学習に系統性を与えるために1年を通じての学習テーマ「生命について」をもうけた。自分と、他人

の命を大切にすること。これが平和教育の目指す一つの目標である。生命のかけがえの無さを知り、生命を脅かすものについて認識を深めていく。

ここに1985年12月に総合学習研究グループを代表して田中が行った開講に当たっての生徒達への趣旨説明に使った文を掲げる。これは、我々の総合学習の授業に対する考えを良く表わしている。

現代ほど人間の尊厳が叫ばれながら、一人一人の人間の命がないがしろにされている時代はないと思います。戦争でのジェノサイド(大量虐殺)を筆頭として、各種の公害や交通戦争、度重なる核実験、「いじめ」による自殺、墮胎、どれをとってもジェノサイドではないでしょうか。また科学技術の発展は人間の生命を延命させてきましたが、反対に、人間の生命とは一体何かを鋭く問う局面を現出させています。植物人間、臓器移植、遺伝子操作、人口受精等の問題は、生命とはなにかを考えることなしに技術だけが進歩して行くとき、延命される生命のかけに、常に犠牲にされる生命がともなうことを見失ってはいないでしょうか。

次に、総合学習「生命について」のもとでとりあげた小テーマの一部を紹介する。

<教師の提起したテーマの一部>

生命を脅かすもの 戦争と公害 人口論と食糧問題  
 ベトナム 異常児障害児の命について チェルノブイリクライシス 核エネルギーの利用と生命 戦争と生命

<生徒が調査研究したテーマの一部>

人間の営みと自然破壊(核エネルギーについて) 日本の食糧問題 21世紀と人類 核エネルギーと生命

総合学習「生命について」が平和教育になっているか否かを次のような指標で見た。

- ① 平和とはどんな状態かを知る。(平和ではない状態とはどんな事かを知る。)
- ② 平和を脅かす物はなにかを知る。(平和な状態を維持するにはどうしたら良いかを知る。)
- ③ 平和に暮らすことを大切にすることを態度や考えが身につく。

前述のように、学校生活、即ち、生徒会活動、HR活動、部・サークル活動等を通じて、基本的人権の擁護と進展、言論の自由、紛争の平和的解決方法などに付いて学んだかということである。特に、真の民主主義社会を少なくとも学校社会に於て作り出すために、他人の言うことを良く聞いて、それを評価し、自分の意見をはっきりと表明する態度が身についたかが大切な指標になる。

これらの指標に照らして、10年間の実践を評価してみると次のようになる。

「平和ではない状態について」や、「生命を脅かすもの」については良く取り上げた。例えば次のような話題を取り上げている。戦争 放射能汚染 差別 森林破壊 フロンガスの問題 食品の安全性 過労死とその背景にある日本の労働環境。このように、「生命」と言う広い立場から平和問題を考えることができた。

この事は、イデオロギーや経済体制の違いからくる紛争に加えて人間の活動や文明のあり方そのものを問題にしなくてはならなくなった地球規模での自然破壊についても真剣に考えなければならぬと言う現在の状況にマッチした平和教育となっている。しかし、受講生の心構えが、自分達は文科系だからと言う意識の壁を突破できず、自然科学的な面からの追求が弱い傾向にあった。

授業形態は、発表と討論の形式をとり、前述のようなテーマを取り上げて行ったので、他人の話をよく聞き、自分の意見をはっきりと述べる訓練は少しずつ行われたといえる。

1989年度の生徒は総合学習で学んだ事を回顧して次のように述べている。……命を大事にしようと思っ

ているのに、戦争によって子供たちの命や体の一部を破壊している。どれだけの人が悲しみ死んでいったかわかりやしない戦争や放射能の恐ろしさをいやと言うほど見たり聞いたりした。物が豊かになり技術が進歩して行くと、生きていくための手段として何気なく使っているものが生命の根元である地球、自然を破壊していることが分かった。まず、ヘヤースプレーなんかで使用しているフロンガス。それに森林の乱伐、そして原子力、等のように生きていく命の為に使っている手段が、技術の進歩が、逆に人間自身を追い詰めている。……

以上の様な文章を書いた生徒がいることから、平和教育の形態や内容は、我々の行ってきた総合学習の内容や形態で行うことが妥当であるといえる。

現在総合人間科の授業の中で中学3年生と高校2年生に対し、平和教育・国際理解教育を実施しているがこれは平和教育を軸とした教科指導のあり方、学校行事のあり方、生徒指導のあり方を示唆したものであり、総合的教育課程の創造の第一歩でもある。

#### 2-2 教科指導からの要請

ある教材を分かりやすく指導するには教科の壁を越えて他の教科の担当者との協力によるティームティチング方式をとる事も効果的である。筆者は、1973年国語科教師の要請を受けて高校2年現代国語の授業を4時間行ったことがある。

(名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第18集 (1973年) P108「総合教科的学習指導をめざしての一試み」参照)

筑摩書房「現代国語2」の中の「科学の現代的性格」(坂田昌一の文)の指導を通じて科学論・認識論の学習を企図した。すなわち、正しい自然認識とはどんなものか、正しい科学のあり方とはどんなものかを考えるきっかけにするというのが当時の目標であった。物理で学んだ事、数学で学んだ事、倫社で学んだ事等を関連させることにより総合的に物事を見るようにしむけたいとしていた。当時授業を受けた生徒の感想につきのようなものがある。

○ 学校に長い間通って授業を受けてきて、こんなに楽しみにした授業はありません。いままで習ってきて、それぞれ教科毎に頭の中にあった別の知識が気持ちのいいくらい頭の中でいろいろな道筋で、パッパとつながり関連し合ってきて、いろいろな知識が初めて手をつないだみたいです。いままで誰の為に何でこんな授業を受けるのかしらと、頭にきつつ学校教育の事を考えていたのですが少しはおさまりました。受験が無くなったならこんな授業をもっと増やせるのではないかしら。(女)

○ (総合学習的授業をおこなうこと) これらはたいへん必要なことだと思う。バラバラに授業を行った結果は、あるテーマはある学科としか考えられない人間になる。そういったことは、いま公害という形で見ることができる。企業が利潤追求のために環境などを考えずに山をきりひらき、汚水をたれ流したりしたものが公害である。これは一つの方面からしか考えなかった結果であり、いくつもの方面から考えればこんな事にならなかったと思う。(男)

○ いまの日本の高校教育の現状(大学にはいるために高校で学ぶ)においては、このような授業は全く意味がない。今の日本は何からなにもまで狂っているよ。(男)

生徒の意見をアンケート調査した結果は、このような総合学習はなるべく特別の時間をもうけて週1~2時間行う。テーマは具体的で、公害、物価、など社会的に問題になっているものが望ましい。あまり講義調にならず討論形式を取り入れる。試験問題を難しくするタネにしない。教師は相当努力して欲しい。この科目の目的は、真の勉強とは、真の学校とはを追求するものであって欲しい。というものであった。

教科指導を充実する事と総合学習の関連に付いての今後の課題は6で述べるが、これらの結果は教科指導の上からも総合学習の必要性を示唆している。

#### 2-3 教育の現状改革の糸口として

##### ～教育の人間化と総合化～

前述の公害教育研究グループでは、公害教育を実践する中で現在の教育への批判的再検討を行っている。(名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第18集

(1973年) P100「公害教育の試み」参照)

その中で、次のような指摘をしている。①総合的に物事を考えさせる事が弱い。各教科が孤立して授業をしている。教科間の連絡が不十分。②地学、生物、保健等が軽視されている。大学入試に関係の薄いものが高校教育においても軽視されている。③自然科学関係の科目では系統性に力がおかれ、教科内容に人間や人間生活が入りにくくなっている。即ち、人間性の欠落が見られる。④労働や生産とのかかわりがみられない。⑤知識と実践の分離が起こっている。学校で学んだ事はテストに使うためだと生徒が考えるようになっている。これは授業では学んだことと実際問題との関連にあまり触れないようにしているせいである。家庭でも掃除など家事の手伝いをさせることがすくない。⑥集団で民主的に物事を解決していく訓練が足りない。

これらの要請に応えるものとしての総合学習による公害教育を目指したのであった。

環境教育にしても平和教育にしても同じ事が言える。上の⑤との関連で言えば、環境教育をうけても、空かんを投げ捨てたり、誰もいない教室に電気が煌々とつけっぱなしになっているのは環境教育の意味が薄い。クラスメートとのトラブルを暴力を使って解決したのでは平和教育は地に着いていないと言える。これらの教育は今後の生き方を考えるところまでいかななくてはならない。そのためには、生活の中に生かした実践的指導も必要である。学級指導、生徒会指導等特別活動との関連を意識してまさに総合的に行うべき事柄である。感想文を上手に書いても実生活に学んだ事が生かされない例は多い。1982年の本校の中学3年生を対象にしておこなわれた総合学習「人間について考える」において、総合学習研究グループの一人は、総合学習の授業のお陰で、担任をしていたクラスでのいじめへの指導が非常にしやすくなったことを挙げている。「人間について考える」の授業を聞いたクラスで陰湿ないじめがあることに担任が気づいた。総合学習の感想文で「人間は実に偉大で、人間であることを誇りに思い、人間であることを大切にしなければならぬ」と書いた生徒までがいじめに加わっていた。そう言う生徒たちとの話し合いの中で、担任は、総合学習でまなんだ人間の歴史、ロボットやサルとの違い、心の問題などを例に人間が大切であることを説いたところ実に良く分かってくれたと言う。話し合った生徒の中には「総合学習の授業で、人間の大切さが良く分かったのに実際の場でそれが良く分からなかった自分が恥ずかしい」と反省文を書いた者もいた。この事はこの総合学習の授業が生活指導に役立てられたことを物語っていると同時に、総合学習といえ

ども、実生活と結び付けて実践しなければ身に付いたものとはならない事を示している。(名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第28集(1983年) P27 「“ゆとり”の時間を利用した総合学習の展開」を参照)

現在、筆者は、本校で展開されている総合人間科の高校3年の選択授業で、自然と人間と言う科目を理科の教師とティームティ칭ングで担当している。ここでは、自然界の出来事や物質をただ単独に抜き出して考えるのではなく、人間にとってどうなのか、生命にとってどうなのかと言う視点をできるだけ入れるようにつとめている。例えば水をとりあげるとき、その歴史や性質と生命や人間との関わりを認識し、現状の水問題を調べ更に家庭等での生活態度の改善点は何かを探っていく。教育の人間化と総合化を総合学習によって追求しようというものである。

#### 2-4 学校週5日制に対応した学校行事の有意義な指導の為に

文化祭や修学旅行を学校教育の一環として行うときそこにどのような意義を見いだすか論議されるところである。特に学校5日制にむけて、教科内容の精選が叫ばれる中で、現状の授業時数を確保するため学校行事の精選という名目でこれら有意義な学校行事を取りやめにする場合がある。しかし、例えば、修学旅行を総合的学習の場として捉えれば、社会科の生きた巡検の場となり或は理科の野外学習の場となる。行事は授業と必ずしも対立するものでは無くなるどころか教室での授業よりも効果的な学習の場として意義あるものとして出来る。

(名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第25集(1980年) P24 「総合学習の場としての研究旅行の試み」参照)

さらに、部・サークル活動を総合学習の場として捉えることで、指導の指針を得ることが出来る。筆者は公害研究サークル・平和探究サークルを1973年～1994年まで公害や平和の問題を考える総合学習の場として指導をした。(名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第25集(1980年) P111 「公害研究クラブの活動報告」及び 第29集(1984年) P9 「平和教育へのとりくみ」を参照)

### 3. 総合学習の実際

#### 3-1 総合学習研究グループの結成と中学3年生を対象にした試み

1973年に総合学習研究グループが結成された。12名であった。12名の教科は以下の如くであった。国語2名、社会2名、理科3名、技術・数学1名、家庭1名、保健2名、英語1名。勿論自主的研究グループで

ある。1980年には前述のように学校行事～修学旅行～を実践の場として選んだ。この経験を経て1981年には「人間について考える」というテーマを掲げ中学3年生を対象にメンバーが順番に授業をすることにした。

“ゆとり”の時間を使った。当初は「生物的存在としての人間」と言うテーマを掲げていたが、やはり授業者の能力から少し広いテーマのほうが良いということになった。

1982年に実践された授業内容は①宇宙の成立から人間の誕生まで②サルからヒトへ③ロボットと人間④食物の歴史⑤人間の繁栄と食糧問題⑥生物における性の役割⑦コトバについて⑧遺伝子工学の発展について⑨生きているとは何か、と言うものであった。(名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第27集 (1982年) P27「“ゆとり”の時間を利用した総合学習の展開」及び第28集 (1983年) P27「“ゆとり”の時間を利用した総合学習の展開」その2を参照)

授業をする教師自身が教科の壁を乗り越えることが容易ではないため、日頃教えている教科のうち人間により良く関連していることや日頃生徒に問題提起したいと感じていた自教科に関連した事を中心に授業のテーマを選んでいる。最初の試みはこのようなどころから始めざるを得ないのである。

いま考えられる改良点は、あるテーマの担当者と他のメンバーとの共同による授業案を作成することと、実際の授業場面でも複数の教師が参加し教師同志の討論を少しでも行えば、授業としては教科の壁を少し乗り越えたことになり従来の授業とは大いに違ったものになったであろう。

この試みで総合学習研究グループのメンバーは何を訴えようとしたのかまた何に向けて生徒に総合学習を促したのだろうか。それは次の如く様々であった。

○ 人間は何処から来て何処へ行こうとしているのかを訴えたかった。

○ 人間の未来、食糧危機の到来を知らせることは受験勉強や、個々の英語・数学といった教科の学習よりも大事であると思った。

○ 人間も生命の一員であることを知らせたかった。

○ 生命の尊さや生きて行く責任を感じさせたかった。

○ ヒューマニズムとは何かを考えさせたい。

○ 真に人間らしいとはどんな事が掴んで貰いたかった。

○ 人間にとって学ぶとはどういう意味か、或いは人生における学習の位置づけを学んで欲しい。

○ 教師も学んでいると言うことを知らせたい。

○ 教師が普段の教科の授業では見せない顔を見せ

たかった。

このような意図を持った一連の授業を受けた生徒が、例えば生命の尊さを感じたとすれば、そこに生徒の総合化する能力が発揮されたことになる。

現在の各教科の定期試験や、科目で指定される入学試験では、単独教科をどれだけ学んだかをみるのであって、学んだ事をいかに使って物事をみるかを試験していない。教科と言う閉じた世界の知識を試すのであって、開いた世界に通じる知識を試していない。

「人間らしさとは何かを掴ませたい」とか「生命の尊さを感じさせたい」等の意図は、まさに生徒に総合的思考を促していることになる。

3-2 高校3年生を対象にした総合学習「生命について」

2-1で述べたように1986年4月から高校3年生文科系選択者を対象に総合学習を始めた。1985年度(1986年1月)をもって終了したこの授業は、当初総合学習研究グループによって運営された。しかし年を経る内に時間割上に割り付けられた筆者と田中がいわば請け負うような形になってしまった。

通常の授業との相違点を次のようなことに求めた

① 教科の枠にとらわれない

② 討論を中心とした授業

③ ティームティ칭ング

④ テーマ「生命について」を掲げる

⑤ 受験準備とは縁が薄い、高校3年間で学んだ事をテーマに向けて総動員して思考する事に力点を置く。自分の命と他人の命を大切にす常識ある市民の育成を目標とした高校としての完成教育をめざす。

授業の展開

一学期 小テーマにもとずく問題提起

問題提起は主に教師が行ったが、半分を生徒が行った年もある。生物の授業と相互乗入れを1回行ったことがある。

二学期 生徒が、自分で選んだテーマにもとずいて調査・研究をする。その報告会を生徒の司会の下で行う。

三学期 補足と反省会 1986年から1994年まで研究成果の報告集を発行した。

この授業の受講者は毎年およそ10名から20名であった。生徒の受講動機は次のようなものである。

テストがないだろう

赤点がないだろう

生命について知りたい

変わった授業のようだ

倫理と理科の授業が同時に聞けそう

他にとりたいたいのがなかった

受講後の感想の主なものは次のごとくである。

討論形式の授業はなかなかよかった

先生の敷いたレールの上を歩いただけ

青年の考えていることを主張する場が高校に欲しい、総合学習の授業はそう言う場だ

テーマが難しい

脳死等生命に関する新聞記事に関心をもつようになった

#### 4. 総合学習は生徒にとって、教師にとって何であったか

##### 4-1 生徒にとって

1993年度より、中学三年生を対象として、週一時間の総合学習形式の授業を設けている。この授業のねらいは、教科の指導と行事（修学旅行）の指導の有機的結合によって教育効果を高めるとともに、教科の枠にとらわれない総合的な思考を促す事にある。ここでは、2年目にあたる1994年度での試みでの生徒の感想を再録する。（名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第40集（1995年）P7「覚える授業から考える授業へ～総合学習“人に付いて”を終えて～」を参照）

T君（人のあり方を考える授業であった）

……（前略）……人の個性などが忘れられ、広い視野で物を見、自分の考えを育てていくことが困難な現在の日本の教育課程において人のあり方を考えさせる時間は「息抜き」とはいいい過ぎだが、発想の転換を促し、人に対する考えを持つことによって「自分」を見つめ直すことになりそれによって学習や社会に出てからの生活に影響を及ぼすだろう。

人について調べまた別の事でもよいが、ペーパーテストでは点の付けることが出来ない教科が存在することによって人の実行力その他を向上させることが出来るであろう。更に、今現在問題である学歴社会を破壊もしくは矯正する一歩となることが可能ではないか。

J君（総合的に見る態度が身に着いたことを表す感想）

僕は民族問題についてとても印象に残りました。僕は卒業論文のテーマに人と戦争の関係を選びました。このテーマと民族については切っても切れない関係があると思うのです。

戦争はよく異民族同士にわかれて行きます。国家間のいさこぎも、民族の対立だと思えます。中国の歴史を見れば漢民族やら満州民族やらモンゴル民族やらできます。清は満州民族の国だから漢民族と戦いました。世界中のあちらこちらをみても民族間の争いは絶えていません。

一学期に（遠足で）行ったリトルワールドもとても印象に残っています。世界各地の民族の生活様式がよくみられたからです。アイヌの家や遊牧民の包など面白いものが沢山ありました。どれをみても僕の関心をひきました。

僕の考えでいくと、異民族だから侵略するなんていうことは思いつきません。世界は広いのだからいろいろな人々がいるのは当然だし、また、協力しあわなければならないと思います。そのためにもいろいろな国の文化を理解しなければいけないと思います。

もし高校になってもこの授業があるなら、人間を歴史的に見ていけばいいと思います。そうすれば、いまの僕達の生活は、どんな過去があって出来てきたのかわかると思うからです。人について学ぶのは大変だけれど重要なことだと思います。

なお、この生徒は現在高校2年生になっているが、ひきつづき国際社会についての興味と関心をもちその研究をしようとしている。

##### 4-2 教師にとって

前述の3-1で教師の素朴な感想を紹介したが、その外に次のような意義が考えられる。

何の為に教えるかという教科の本質を考える機会となる。生徒を担当教科からだけでなく総合的にみるようになるなどの利点がある。即ち新しい教科指導観、生徒観、評価観、さらには新しい学校観、教育観を得る契機となる。選別の為の「教育」でなく育てる教育とは何かを考える契機となる。

一方常に新しい分野に挑戦する努力を日常のルーチンワークを処理した上で要求される。このため教育への情熱や意欲が必要とされる。

#### 5. 総合学習のあり方

総合学習に取り組むには、総合学習の目的はなにか即ち何の為に総合学習という形態を取るのか、どんな事を教えたいときにこれは有効かを考えていく必要がある。

上の2で詳しく述べたように、公害教育、環境教育、平和教育、生命尊重の教育、等の展開を企図するならば有効な形態である。

さらには、例えば、「理科、社会に有効で、国語、英語、数学のドリルには向くのか」、「ドリルの動機づけにはどうか」などのような視点も大切である。

総合学習にはじめて取り組む場合、まず一度は各教科の学習内容や教材の中で総合的に扱った方がよいところを出し合うべきである。そこから、自教科の授業の動機付けや補強となるような教材が他教科の中に存在しないかと探ればよい。例えば、物理と数学、生物と家庭と保健、英語と国語、技術・家庭と社会または

理科等。

次に総合をどんな分野で行うかを考える。教育内容の総合、教育場面の総合、教育方法の総合、知識と実践の結合等が考えられる。

これらの総合学習を通じて生徒の総合的思考力を促し、学んだ事と自分や人間との関係を考えさせる。これは生き方を考える機会を意識的に与えることになる。言い替えれば選別の為の教育からの脱却となる。

教科の壁を越えるためのティームティーチングの導入を考えるべきである。ティームを組んでも教科の壁は非常に厚く一人の教師がこれを一気に乗り越えることは難しいが、現在本校の行っている学年担任団方式はその有力な乗り越え方式である。学年担任としての意識が先行し教科担任としての意識が後へ引っ込むからである。

## 6. 今後の考察課題 ～まとめ～

生き生きとした総合学習を全校的に展開するには新しい試みを生み育てる自由な雰囲気が必要である。その中で自主的な研究グループの育成をする必要がある。職制を通じた管理的雰囲気では生き生きとした総合学習の展開は不可能であることをまず指摘したい。

今後の課題として、主に名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第38集 (1993年) P5「総合学習の実践よりみた、学力とその評価」で指摘したことを中心に述べる。

### 6-1 評価についての意識変革

#### 6-1-1 現代が要請する学力とはどんなものか

現在まだ主流を為す暗記型詰め込み教育は、明治の富国強兵時代から昭和の高度経済成長時代までの、西洋先進諸国に追い付く事が目的であった時期に採られた教育であった。現在の日本がおかれた状況は、この暗記型詰め込み教育ではやって行けなくなっている。科学技術・国際政治経済・環境問題・平和問題等の分野を見ると、次の世界を担う若者達には、広い視野に立った様々な知識を基にして国際的民主主義のもとで諸課題を総合的かつ独創的に解決していく能力が必要になる。従って次代を担う若者の教育は、暗記型詰め込み教育を主流にするのではなく、問題解決型主体性育成の教育を主流にしないといけない。しかし中学生や普通科高校生に通俗社会が要請する学力は、入試問題を解く能力である。この能力を付けさえすれば他の力があまりなくとも、それほど非難されることはないのが現状である。

高等学校を卒業するにさいして生徒が身に付けて欲しい基礎学力とは何だろうか。普通高校においては、基礎学力とは大学入試問題を解くための物とされている。基礎学力とは何かと言う学力論をここで展開

する気はないが、記号操作、いわゆる読み書き算盤的能力はその中に含まれることはだれしも認めることである。前述の経済問題や環境問題などを国際的平和的に解決する為の基礎能力と入試問題を解く基礎能力とは読み書きそろんのレベルでは重なることはないまでもない。ここで問題にしたいのは、象徴的に言えば基礎学力の向上の為に、更に難しい入試問題に挑ませるのか、高校生の程度にふさわしいテーマの下で、今まで学んできた個別的知識技能を総合する事に挑ませるのかが問われている。入試問題を解く基礎学力も無いのにそれらを総合する能力など付くはずはないという俗論が存在する。より難しい入試問題に挑むという動機付けでは指導しきれなかった部分に対し、学習者の主体性を発揮させる動機付けとして総合的知識を要求する課題に挑ませるよう指導をすることは大いに意味のあるところである。自由研究・野外活動・研究旅行・講演会などで実際問題の提示をすることは基礎的学力の獲得への強い動機付けの一つである。

#### 6-1-2 総合学習の目指す学力

総合学習の目指す学力は単に大学入試問題を解くことを主目的としたものではなく、各教科で学んだ事柄を総合する能力と態度及び、各教科で学んでいる個別的知識がどう使われるかを知るとことによってそれを学習し獲得する意義を理解していく力にある。

学力、基礎学力はどんなものかは、それが論議される時代背景とその測定方法とに大きく左右される。情報社会における基礎学力は何かという命題を立てるならば、その1つは、当然、沢山の情報の中から自分が必要とする情報を集め、それを総合的に再構築する力だと言える。そして更にそれを分かりやすく発表する事ができればより素晴らしい学力と言える。

ここでは分野別の情報を集めそれを総合して1つの考えを纏めることをすることになる。

自分の見解を持つことが出来、それをクラスメイトなど仲間うまく説明できれば、将来例えば原発の是非を考える上での基礎的学力が身に付いたと言える。更に、エネルギー問題をめぐって自分の生活態度がほんの少しでも変われば実践力のある素晴らしい学力が身に付いたと言えよう。総合学習が目標とする学力とはこの様なものであり、これは、情報化社会に必要なとされる基礎学力の1つという事ができる。

物理や生物学の基礎的な知識もおぼつかない生徒ではその様な内容の学習は砂上の楼閣であるという考えもある。しかし、原発の是非を考えるにはその様な物理や生物学に関連した基礎知識を総合する能力が必要であるが故に、1つのテーマに取り組むことにより何事を理解するにもその基礎となる知識が必要だということだけでも分かれば、高卒程度の基礎学力の一部は

付いたと考えてよい。

高校3年生を対象に10年間行ってきた総合学習“生命について”の目指す学習内容はその当初から、次のようなものであった。(注：名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第32集 1987 P33総合句集「生命について」の授業実践のまとめと今後の課題を参照)

- ① 自分と他人の生命を尊重することの重要性を知ること
- ② 生命を脅かすものの実態を知ること

その目指す学力は

- ① 生命に関連した事柄に付いての問題点を総合的に把握できること
- ② 生命に関わる問題点の解決に向けて、総合的に思考できること
- ③ 学んだ事を、他者に発表したり実践できること
- ④ 生命に関連した事柄に関心を持ち、学習の意義を理解し、将来にわたって学習意欲を持ち続けること
- ⑤ 自学自習の力がつくこと

これらの指標は、授業が旨くいっているかの判定指標でもあることはいうまでもない。

その評価の方法及び真の多面的総合評価を生むための条件は、

- ① 小論文形式の筆記試験と、授業中での討論、発表、司会、聞く態度や自学自習による課題研究の成果などを総合的に評価すること。
- ② 討論、自主研究、発表といった生徒を主体とする授業の展開に留意すること。
- ③ 複数の教師による授業と評価、生徒一人一人を良くみるための少人数教育がなされること。
- ④ 学校に於ける諸活動を教育の観点から総合的に据えようとする教育の総合化(注：名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第36集 1991 P95「平和教育としての総合学習の実践(その2)」の中に平和教育の観点からの“教育の総合化”についての筆者の記述があるので参照されたい。)の追求がなされること。
- ⑤ 評価が生徒の選別ではなく生徒と教師の進歩の為になされること。そのことを教師集団として確認すること。

これには上級学校への内申書のあり方も問題になる。

## 6-2 生徒相互間の学びあいを強める方法

現在筆者は、高校2年生を対象に、社会科の教師とティームを組んで、「国際理解と平和」と言う選択の総合人間科の授業を始めている。ここでは、これまで

の総合学習の実践経験を受けて、生徒と共に授業を作ることを目指し、授業の進行を生徒の代表にさせる試みをしている。何をどんな形態で学びたいかを、生徒同士で討論させ、その結果をうけて授業の計画も立てさせている。このことは、生徒の自発性と学び合いを引き出す上で有効である。

## 6-3 教科学習の或は学校教育の人間化

詰め込み式教育は、教科至上主義教育や管理至上主義教育とあいまって学校生活を殺伐とした非人間的状況にしている。これがいじめや自殺事件の直接・間接の原因となっている。詰め込み式教科至上主義教育では、教育本来の目的である「世界の平和と人類の福祉」に関する事は忘れ去られ、僅か社会科のみで教えられ、しかも、単なる試験対策用知識として教えられることが多い。生徒のいじめ・自殺問題への根本的対策は、この教育基本法が掲げる教育本来の目標を、学校教育全体の中で日々追求することの中にある。したがって、教科指導と学校行事の指導を、「人について」とか「平和について」をキーワードとして有機的に結び付け、総合学習形式で行うことの意義は大きい。

「ひと」について学ぶことと「総合的」に学ぶことは、原爆をはじめとする核兵器やサリンをはじめとする毒ガス兵器などを、「世界の平和と人類の福祉」との関係性を十分総合的に検討せずに、ただ命令されるままに或は興味本位や喰うために作るような科学技術者等の発生を防ぐ教育面での一つの手だてでもある。

## 6-4 覚えさせる教育から考えさせる教育へ

前述の(6-1)で述べた学力観から、これは当然の事である。覚えさせられる授業が多いため、ほとんどの生徒は、自由テーマによる課題解決型の学習に新鮮な喜びを感じている(名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第40集 1995年 P5「“覚える授業”から“考える授業”へ～総合学習“人について”を終えて～」を参照)

考えさせる教育を行うには、生徒が生き生きとする場面が必要であり、一人一人を大事にする必要がある。そのためには、教師1人あたりの生徒数を20人以下にする必要がある。生徒数が減少している人口動向はこの学級定員減を実現する絶好の機会である。